

「あの日」に戻れる一冊

まだ時代が「昭和」だった1983年4月、テレビではNHKの朝ドラ『おしん』が始まり、村松友視の直木賞受賞作『時代屋の女房』が映画化され夏目雅子の美しさに注目が集まっていた頃、角川書店から女性対象の小説誌『月刊カドカワ』が創刊されました。



最後の読書 堀井六郎

私はその前年まで別の大手出版社で営業の仕事に従事していましたが、中学生の頃あこがれた『中学三年コース』（学研）、『ボーイズライフ』（小学館）のような10代の若者雑誌を作りたいという希望を捨てきれず退職、そのとき年齢はすでに30歳を超えていました。

人づてに角川の創刊情報を聞き、アルバイトの身ながらスタッフとして参加、初めて手がけた雑誌が『月刊カドカワ』でした。常駐スタッフは40代前半の編集長、30代後半の副編集長、そして編集経験のないアルバイトの私、この3人からのスタートでした。

「最後の読書」というより、泉下に入る前にもう一度手に取って、その持ち重りを感じてみたい一冊です。ダンボールに入れたままの創刊号は転居するうちに行方不明になってしまいました。が、手にすれば、『ドラえもん』に登場する「どこでもドア」と同じような機能が発揮されることでしょう。創刊号の校了日、アルバイトの同僚と夜明けの外苑スタジアム通りを歩きながら雑誌づくりの大変さを痛感したこと、編集者生活が始まり、文字どおり眠る暇がなかったある日のこと、睡魔に襲われ地下鉄ホーム

の白線付近を眠りながら歩いていて入線してきた電車の警笛で命拾いしたこと等々、本に触れただけで当時のことはもとより、本づくりをめざして働いていた営業マン時代の映像から、現在までのその後の道のりが一瞬のうちにライトアップされて再現されるような気がします。

出版業界に居続けることのできた私にとって、起点となり血肉となった恩ある一冊ですが、今でも親交のある当時の徹夜仲間たち（編集アルバイト、校正者デザイナー、写植担当）を結集させる磁力も備えていました。

現在、私は『時代屋の女房』の舞台となった大井町で仕事をしています。夏目雅子の輝きを堪能できるシーンに使われた実在の歩道橋とほど近く、歩道橋を目にする、彼女や当時まだ若かった頃の自分と仲間たちの映像が甦ってきます。

ほりい・ろくろう 1952年生まれ。編集者。著書に『私的「昭和音楽歌謡考」』全4集。



100回どころか1056回も

武和田 亀
るんだなど驚きました。早速、ご自身のいた女性誌「クレア」で原稿を依頼。木山捷平、川崎長太郎、富士

「週刊文春」（文藝春秋）を開いても、坪内祐三さんの「文庫本を狙え！」がない。それが寂しいとメソメソしていたら、同誌4月23日号が心の籠もった追悼企画を組んでいて、うれしくなった。

追悼座談会が5頁。親しかった中野翠氏、泉麻人氏に、編集者として深く付き合った平山周吉氏の3人が、マニア度高めだがバランスのとれた発言で、ツボちゃんとその仕事を生き生き甦らせる。中野さんは脚力に着目。神保町の古本屋街などを「一緒に歩いているときも、犬がクンクンとかくようにして、早足だった。セツカチなのよね。」

平山 さんは、ツボちゃんがかた「月刊Asahi」（92年7月号）の特集で、彼を強く意識する。「若いのに変な引き出しをいっぱい持っている」

「週刊文春」（文藝春秋）を開いても、坪内祐三さんの「文庫本を狙え！」がない。それが寂しいとメソメソしていたら、同誌4月23日号が心の籠もった追悼企画を組んでいて、うれしくなった。

追悼座談会が5頁。親しかった中野翠氏、泉麻人氏に、編集者として深く付き合った平山周吉氏の3人が、マニア度高めだがバランスのとれた発言で、ツボちゃんとその仕事を生き生き甦らせる。中野さんは脚力に着目。神保町の古本屋街などを「一緒に歩いているときも、犬がクンクンとかくようにして、早足だった。セツカチなのよね。」

平山 さんは、ツボちゃんがかた「月刊Asahi」（92年7月号）の特集で、彼を強く意識する。「若いのに変な引き出しをいっぱい持っている」

「週刊文春」（文藝春秋）を開いても、坪内祐三さんの「文庫本を狙え！」がない。それが寂しいとメソメソしていたら、同誌4月23日号が心の籠もった追悼企画を組んでいて、うれしくなった。

追悼座談会が5頁。親しかった中野翠氏、泉麻人氏に、編集者として深く付き合った平山周吉氏の3人が、マニア度高めだがバランスのとれた発言で、ツボちゃんとその仕事を生き生き甦らせる。中野さんは脚力に着目。神保町の古本屋街などを「一緒に歩いているときも、犬がクンクンとかくようにして、早足だった。セツカチなのよね。」

平山 さんは、ツボちゃんがかた「月刊Asahi」（92年7月号）の特集で、彼を強く意識する。「若いのに変な引き出しをいっぱい持っている」